



「フレーム」ということ

昨日の通信は、写真を大きく掲げすぎた関係で、文章の方（特に最後の2行）はちょっと分かりにくかったかも知れない。補足しておこう。

*

繰り返すと、あの写真はドイツ人写真家の Thomas Hoepker氏が9・11に撮影したものである。テレビで事態を知ったヘプカー氏は、急いで現場にクルマで駆けつけようとしたが、マンハッタンとは川を隔てた場所に出てしまう。彼は仕方なく何枚かを撮影し、それをそのままにしておいた。

後日、彼の展覧会が開かれることになり、一人のキュレーターが彼の元を訪れて偶然この作品に注目する。背後では世界が終わろうとしているのに、その手前では、人々が楽しそうに太陽を浴びながら談笑している…。こんな面白い作品はないというのである。こうして、ヘプカー氏はこの作品を発表することになる。

ところが、この作品が発表されると大きな議論が巻き起こった。議論の詳細については知らないが、おそらくは手前の人々に対する批判が中心だったのではないかと想像される。というのも、写真の中に写っている何人かの人々から、「辛い思いをしている」という連絡をヘプカー氏が受けることになるからである。

しかも、写真の中央に写っている若い女性はプロのフォトグラファーで、彼女のヘプカー氏に対する問いかけについては昨日の通信にも書いておいた通りである。「私は人を撮影する時は声をかけて許可を得る、あなたはなぜ私たちを撮ったのか？」。

ヘプカー氏の答えは「声をかけてから撮れば、おそらくこの写真はなかっただろう」であるが、ヘプカー氏のこのスナップは、完全にスナップとして撮られたわけで、写っている本人たちには一切許可を得ていないことになる。これは、現代の常識からいっても、肖像権という観点から大きな問題となるはずである。

*

昨日の通信の最後に「この写真は素晴らしい。一方で恣意的なフレームが問題を提起する代表例でもあろう。」と書いた。この場合の「フレーム」は、空間的であると同時に時間的なものでもある。

おそらく写真に写っている彼らも、あの事態が生じたその瞬間には、驚き、悲しみ、そして何か行動を取ろうとしたに違いない。しかし、その最初の衝撃的な感情から回復した時には、ヘプカー氏と同じで、場所も離れているし、今から駆けつけても自分たちにはどうしようもないだろうといった思いが生じたのかも知れない。

しかし、そういう時間的な推移を写すことなく、あの瞬間のあの一種寛いだ雰囲気だけを画像として記録してしまうと、もはやその画像が一人歩きをし始めてしまうのである。

*

あの、誰もが混乱し悲嘆にくれずにはいらなかった状況の、そのすぐ近くの場所で、このような「日常」が進行していたことを記録したことの意味は大きい。一方で、その写真の「フレーム」に対しても、私たちは意識的でなければならないのではないのか。